

令和 6 年 6 月 16 日現在

機関番号：22301

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K14134

研究課題名（和文）在留外国人への援助政策の賛意を促進するには：ステレオタイプの内容に注目して

研究課題名（英文）How to promote approval of aid policies for foreigners in Japan

研究代表者

田戸岡 好香（Tado'oka, Yoshika）

高崎経済大学・地域政策学部・准教授

研究者番号：10794018

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：多文化共生は喫緊の課題であるが、在留外国人に対する支援体制は十分ではなく、その一因として在留外国人に対するネガティブなイメージが挙げられる。本研究では、ステレオタイプの内容が能力と人柄の二次元で構成されるというステレオタイプ内容モデルに基づき、日本において在留外国人がどのようなステレオタイプをもたれているのかを明らかにした。具体的には、外国人労働者は低スキル職に就業しているイメージがあり、過度にたくましいと認知されるバイアスがあることが明らかになった。こうしたステレオタイプを明らかにした上で、在留外国人に対するイメージを改善し、援助意図を高める方略について検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

在留外国人は日本において増加しているにもかかわらず、本邦において在留外国人に対する偏見を検討した研究は多くない。本研究において在留外国人に対するイメージの詳細を検討することで、たくましさに関する認知バイアスがあることが示された。こうしたイメージは彼らが援助がされにくくなる一因となる可能性があり、多文化共生における心理的な障壁の原因を実証的に明らかにする一助となったと考える。また、ネガティブなイメージの改善方法を検討し、援助政策への賛意を増加させる方略の有効性を検討することができた。以上より、本研究の知見は在留外国人の人権保護と社会的包摂を推進するための基盤となる知見を提供するものである。

研究成果の概要（英文）：Multicultural coexistence is an urgent issue, but the support system for foreign residents is insufficient, partly due to the negative image toward them. This study, based on the Stereotype Content Model which posits that stereotypes are composed of two dimensions: competence and warmth, aimed to clarify the stereotypes toward foreign residents in Japan. It was found that foreign workers are perceived as being employed in low-skilled jobs and as being tougher than Japanese people. Additionally, we examined strategies to improve the image of foreign residents and enhance the intention to support them.

研究分野：社会心理学

キーワード：在留外国人 ステレオタイプ 偏見 バイアス メタステレオタイプ 援助行動

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

昨今、在留外国人は増加の一途をたどり、在留外国人 300 万人時代が来るといわれている。そうした社会において、多文化共生を推進していくことの重要性は繰り返し強調されているにもかかわらず、在留外国人は信用できないといったイメージが持たれたり、劣悪な労働環境が問題になったりと、サポートが行き届いていない現状がある。在留外国人が増えていく中で、多文化共生のための政策の立案・施行には国民の賛意は欠かせない。そこで、本研究では、日本における在留外国人に対するイメージを改善し、援助政策への賛意を生み出すにはどうすればよいかを社会心理学の観点から検討していくこととした。

2. 研究の目的

本研究では、ステレオタイプの内容が能力と人柄の二次元で構成されるというステレオタイプ内容モデルに基づき、(1) 日本において在留外国人は「冷たく無力」というステレオタイプをもたれているのかを明らかにする。さらに (2) 在留外国人は過度にたくましいとみなされ、援助されにくい存在であることを明らかにする。その上で、(3) 在留外国人から日本人がどのようにみられるかというメタステレオタイプの視点を取り入れることで、イメージの改善法を検討し、援助政策への賛意を生み出す方略を考える。

(1) 日本における在留外国人のイメージ

ステレオタイプ内容モデル (Fiske et al., 2002) によると、移民などの在留外国人は「冷たく無力」なイメージを持たれやすいとされるが、本邦においては詳細な検討はされてこなかった。そこで、研究 1 では、日本において在留外国人がどのようなイメージを持たれているのかを検討することとした。その際、外国人労働者として様々な形態・業種で働いている人々がいるため、職業別のイメージを検討することとした。

なお、本研究課題は新型コロナウイルス感染症が流行したコロナ禍で行われた。特に流行初期には、外国との入出国が制限される中で、外国人に対するデマが社会問題となった。そうした社会情勢を鑑み、研究 2・3 では、コロナ禍における外国人に対する態度も検討した。

こうした在留外国人に対するステレオタイプを詳細に検討することで、多文化共生の障害になっている人々の心理を明らかにすることができる考えた。

(2) 在留外国人のたくましさに関する認知

2つ目の目的として、在留外国人に対するたくましさの認知について検討することを目的とした。先述したように、在留外国人は「無力」なイメージを持たれる可能性があり、実際、安い賃金での雇用のために困窮する在留外国人は少なくない。欧米の研究によれば、社会経済的に地位の低い人々は、そうでない人々に比べて、精神的・肉体的に痛みを感じにくいというステレオタイプをもたれることが指摘されている (Cheek et al., 2019)。こうした知見を在留外国人にあてはめると、彼らの貧困という状況は当人たちにとってさほど痛みを伴わないもので、援助の必要はないだろう、という認識を強めてしまう可能性がある。そこで、本研究では、在留外国人など社会経済的地位が低い人達は痛みを感じにくいというステレオタイプが日本においても生じるかを検討することとした (研究 4・5・6a・b)。

(3) 在留外国人に対するイメージ改善と援助の促進

以上の研究を踏まえ、在留外国人に対する援助政策への賛意を生み出す方略を検討した。その際、対人関係の改善には他者の視点を取り入れることが有効であるという観点から、以下の2つの実証研究を行った。

一点目に、集団間関係において他者の視点を取り入れる方法として、メタステレオタイプに注目した (研究 7a・b)。メタステレオタイプとは、自集団が外集団からどう見られていると思うかという信念である。ステレオタイプ内容モデルに依拠し、メタステレオタイプの内容を人柄と能力に分け、その影響について検討した。

二点目に、在留外国人に対する援助を増加させる方法として、寄付行動に注目し、募金広告の内容が援助行動に及ぼす影響を検討した (研究 8)。その際、募金広告を見ることで他者の苦境を想像したり、他者の視点に立ったりする共感性が影響すると考え、向社会的行動や愛他的行動と関連する視点取得の個人差を考慮に含めた。

3. 研究の方法

以上の3点について、社会調査および心理学実験による実証研究を行った。

(1) 日本における在留外国人のイメージ

研究1：外国人労働者の職業イメージの調査（田戸岡・石井，2024）

外国人労働者の中には、製造業や技能実習生、高度人材など、様々な立場や職業に従事している人々が含まれる。そこで本研究では、日本人が外国人労働者の職業の違いによってどのように異なるステレオタイプを抱いているのかを、ステレオタイプ内容モデルの観点から、能力と人柄のイメージについて検討した。職業は事前調査を行い、日本で働く外国人がどのような職業についているかを思い付くままに3つ以上書くよう求め、記述内容を基に選定した。その結果、リストアップされたのは、工場労働者、語学教師、コンビニ店員、ITエンジニア、建設作業員、飲食店員、介護士、農業従事者であった。これらの職業について、外国人であることがわかるように提示（例：「日本の工場で働く外国人」）し、それぞれのイメージを尋ねた。加えて、「外国人労働者」、「技能実習生」、「留学生」のイメージについても尋ねた。

研究2：コロナ禍における否定的な集団間態度

コロナ禍による混乱の中で、外国人に対するさまざまな流言が広まり、偏見や差別が社会問題となった。感染症はヒトの生存の危機となるため、私たち人には罹患のリスクを回避するための行動免疫システムが備わっている。異なった文化的規範を持つ外国人との接触は病気の伝染リスクを高めると知覚されることにつながるため、感染症脅威下では、外国人に対する偏見が強まることが示唆されている。そこで、研究2では、行動免疫システムの考え方にに基づき、コロナ禍において外集団に対する否定的態度が増加していたかを検討した。具体的には、中国人をはじめとした外国人や、コロナ感染者、医療従事者といったさまざまな対象に対する態度を尋ねた。

研究3：ワクチン接種が在留外国人に対する態度に及ぼす影響（田戸岡・石井・樋口，2021；2023）

研究2でも示したように、感染症脅威は行動免疫システムにより外国人に対する偏見を生じさせるが、Huang et al. (2011)によればワクチン接種をすることでそうした偏見を低減できることが示されている。本研究では新型コロナワクチンの接種が在留外国人に対する態度に及ぼす影響を検討した。高齢者のワクチン接種が始まる前（2021年4月）に、外国人に対する態度をベースラインとして測定する事前調査を行った。その後、全国的にワクチン接種が進んだ段階（2021年7月）で、事後調査を行い、感染嫌悪の個人差、ワクチンの接種状況、ワクチンの有効性認知、外国人に対する態度を測定した。

(2) 在留外国人のたくましさに関する認知

研究4：社会経済的地位が打たれ強さの認知に及ぼす影響（田戸岡，2022a）

社会経済的地位が低い人は、ネガティブな出来事に遭遇する経験が多いと考えられる。そのため、彼らはネガティブな出来事に対する耐性がある一方で、ポジティブな出来事にはより喜びを感じやすいと認知されるという（Cheek & Shafir, 2020）。本研究はこうした社会経済的地位によるバイアスが日本においても生じるのかを検討した。実験では、経済状況（貧困／裕福）および性別（男／女）が操作されたターゲット人物の文章と写真を参加者にランダムに提示した。その人物がある出来事を経験したときに、どの程度ネガティブ／ポジティブな感情を感じると思うかを推測するよう求めた。

研究5：外国人労働者の打たれ強さに関する認知バイアス（田戸岡，2022b）

異人種（Trawalter et al., 2012）や社会経済的地位が低い人（Cheek & Shafir, 2020）は、ネガティブな出来事に遭遇する経験が多いため苦境に強いと判断され、痛みやネガティブな出来事に対する耐性があると認知されやすい。一方で、ポジティブな出来事に対しては、地位の低い人は高い人に比べて、より喜びを感じると認知されやすい。外国人労働者は、日本人にとって異人種であり、一般的に地位が低いとみなされやすいため、こうした認知バイアスが生じやすいと考えられる。このことを検討するため、研究4のパラダイムに基づき、人種（日本人／ベトナム人）および性別（男／女）が操作されたターゲット人物の文章と写真を参加者にランダムに提示し、その人物がある出来事を経験したときに、どの程度ネガティブ／ポジティブな感情を感じると思うかを推測するよう求めた。加えて、ターゲット人物に対するたくましさや地位に関するイメージについても尋ねた。

研究6a・b：痛み耐性と精神的たくましさに関する認知バイアス（研究6a 田戸岡・石井，2023）

研究5から、外国人労働者はたくましいと認知されていたが、ここでの「たくましさ」は身体的な強さを示すのか、精神的な強さを示すのかは明らかではなかった。そこで本研究では、外国人労働者は日本人に比べて身体的痛みへの耐性があり、精神的にたくましいと認知されるのかを検討することとした。研究6aでは、研究5と同様に4種類のターゲット人物（人種：日本人／ベトナム人×性別：男／女）をランダムに提示した。その人物が痛みを感じやすいかどうか、精神的にたくましいかどうかを尋ねた。加えて、こうした認知バイアスが在留外国人に対する援助政策の賛意に及ぼす影響も検討した。

なお、研究6bでは、タイ人をターゲット人物として同様の手続きで実験を行った。

(3) 在留外国人に対するイメージ改善と援助の促進

研究7a・b：メタステレオタイプが外国および外国人への態度に及ぼす影響

(研究7a：小森・田戸岡，2021，研究7b：田戸岡・小森，2023)

研究7aではタイ人をターゲットとし、タイ人から日本人がどのようにみられているかという架空のランキングを見せることでメタステレオタイプの内容を操作した。具体的には、「タイの人々は日本人を有能だと思っている」または「人柄がよいと思っている」という情報を呈示し、統制条件ではメタステレオタイプを呈示しなかった。メタステレオタイプの操作を行った後に、タイの水害に対して災害救助車両と災害救助隊をどの程度派遣するべきかといった援助意図をたずねた。

研究7bでは、同様のパラダイムを用いて、日本における外国人労働者の現状について説明し、架空のランキングを提示することで独立変数を操作した。その後、彼らに対する態度および援助政策への賛意を尋ねた。

研究8：募金広告の内容が在留外国人に対する募金行動と援助政策への賛意に及ぼす影響

(田戸岡・石井，2021；田戸岡・石井，投稿中)

在留外国人に対する2種類の募金広告を用意し、広告の内容が在留外国人に対する募金行動に及ぼす影響を検討した。実験では、コロナ禍で在留外国人が苦境に立たされているという内容（援助必要性広告）と募金をすることで在留外国人を救うことができるという内容（援助効果広告）のいずれか一方を参加者に提示した。その後、在留外国人を支援する団体に対してどのくらい募金をしようと思うか、および在留外国人を支援する政策に対する賛成度を尋ねた。

4. 研究成果

(1) 日本における在留外国人のイメージ

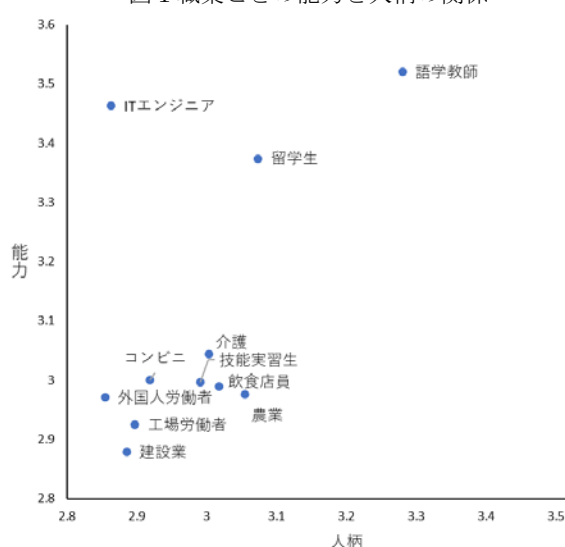
研究1：外国人労働者の職業イメージの調査

人柄と能力に対する評定を基に分布した結果、2つのクラスタに分類された（図1）。第1クラスタには、外国人労働者、工場労働者、コンビニ店員、建設作業員、飲食店員、介護士、農業従事者、技能実習生が含まれた。第2クラスタには、語学教師、留学生、ITエンジニアが含まれた。

クラスタ間でイメージが異なるかを検討したところ、人柄に対する評定はクラスタ間に有意差は見られなかった。能力評定はクラスタ1がクラスタ2より低く、たくましさはクラスタ1のほうが高かった。このように、相対的な能力の高低によって2つのグループに分類された。

職業を明記せずに「外国人労働者」という名称で尋ねた場合には、低スキル職業の分類に含まれており、一般の人々が「外国人労働者」という言葉から想起するイメージは、主に低賃金で肉体労働を伴う職種に偏っていることを示唆している。

図1 職業ごとの能力と人柄の関係



研究2：コロナ禍における否定的な集団間態度

調査の結果、とくに感染症に対する嫌悪感が強い場合に中国人に対して否定的な態度が強く持たれていた。また、武漢ウイルスという呼称をしかたがないと考える態度もみられた。WHOは偏見や差別防止の観点から感染症に特定の地名を使わないように呼び掛けており、こうした呼称を黙認することは中国人への偏見、差別に直結し、日中間の対立にもつながる懸念を孕んでいるだろう。加えて、在留外国人よりも日本人を優先すべきであるという排外的な考え方が高まっていることも示された。

研究3：ワクチン接種が在留外国人に対する態度に及ぼす影響

調査の結果、行動免疫システムの想定と一致して、コロナワクチンの接種が完了していない状態では、感染嫌悪が高い場合に外国人に対する不寛容な態度が見られた。しかし、ワクチンの接種を完了すると、特にコロナワクチンの有効性を高く認知している場合に、感染嫌悪に由来する偏見が弱まっていた。こうした結果は、ワクチン接種によるリスク認知の変化が外国人に対する偏見を和らげる可能性を示しており、感染症対策やワクチン接種の促進が寛容な社会の形成に寄与することが示唆される。

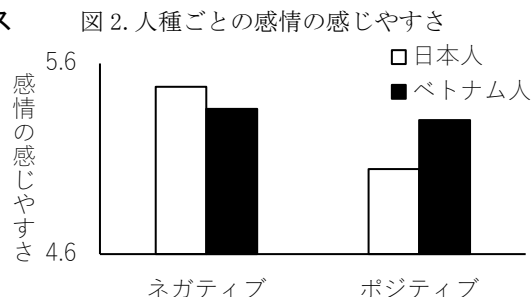
(2) 在留外国人のたくましさに関する認知

研究4：社会経済的地位が打たれ強さの認知に及ぼす影響

実験の結果、ネガティブな出来事への耐性についてはターゲット人物の社会経済的地位の高低による差はなく、経済状況による認知バイアスはみられなかった。他方、社会経済的地位が低い人物よりも、ポジティブな出来事に対して喜びを感じやすいだろうと評定された。Cheek & Shafir(2020) の知見は一部支持されるにとどまったが、こうした認知バイアスがあることで、社会的弱者に対する援助が実際には不足している状態であっても、現状で十分であると考えられてしまうかもしれない。

研究5：外国人労働者の打たれ強さに関する認知バイアス

研究4と同様に、人種によるネガティブな出来事に対する打たれ強さのバイアスはみられなかったものの、外国人労働者は日本人と比べてポジティブな出来事に対して喜びを感じやすいと評定された。また、外国人労働者は日本人よりも地位が低く、たくましいと認知されることが示された(図2)。



研究6a・b：痛み耐性と精神的たくましさに関する認知バイアス

研究6aでは、ベトナム人は身体的痛みへの耐性があるという認知バイアスは見られなかった。他方で、これまでの研究と一致して、日本人よりもベトナム人の方が精神的にたくましいと認知されることが示された。ただし、痛みやたくましさの認知が援助政策に及ぼす影響はみられなかった。なお、タイ人をターゲット人物とした研究6bにおいても同様の結果となった。

(3) 在留外国人に対するイメージ改善と援助の促進

研究7a・b：メタステレオタイプが外国および外国人への態度に及ぼす影響

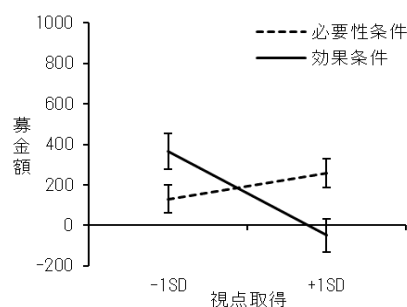
研究7aは、実験操作によって呈示されたメタステレオタイプの知覚は生じていたが、援助意図の程度は条件間で有意差が見られなかった。事後的な分析を行ったところ、国際間の相互依存の必要性を低く認知し、元々タイ人にポジティブなイメージを抱いていない場合、「日本人はタイ人に有能だと思われている」という情報が呈示されると、そのほかの条件よりも援助意図が高まった。

研究7bでは、外国人労働者から人柄がよいと思われているという認知は、返報的に、外国人労働者を協力的でよい人であると捉え、憐みを感じやすくさせていた。他方、能力のメタステレオタイプは、外国人労働者の能力の認知や地位の高さの判断には影響を及ぼさなかった。

研究8：募金広告の内容が在留外国人に対する募金行動と援助政策への賛意に及ぼす影響

実験の結果、広告内容が援助意図に及ぼす効果は視点取得の個人差によって調整されていた(図3)。視点取得傾向が低い場合には効果広告が援助意図を増加させ、視点取得傾向が高い場合には必要性広告が募金額や援助政策への賛意を高めた。援助意図を増加させるために有効な広告は人によって異なることが示唆された。なお、図3は一般線形モデルによる予測値のため、負の値を取る場合がある。

図3.募金額における広告内容の効果



以上の結果から、得られた成果をまとめると、(1)日本人は在留外国人を「冷たく無力」とみなす傾向があり、外国人労働者には低スキル職に就業しているイメージがあることが示された。加えてコロナ禍では外国人に対する偏見が強まる可能性が明らかになった。また、(2)在留外国人は日本人よりも精神的にたくましいと認識されることが一貫して示された。こうした認知は、外国人労働者の人権問題への対処が不十分になり、それが正当化される一因となる可能性があるため、注意が必要だろう。最後に、(3)メタステレオタイプの内容や募金広告の内容が外国人への援助意図に影響を与えることが示された。いずれの方略においても個人差によってその効果が分かれる部分があり、詳細な検討をしていく必要があるだろう。また、援助政策の賛意については一貫した効果が得られていないため、多文化共生の推進を考えていく上で、慎重な議論が必要となるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 田戸岡好香・石井国雄・樋口収	4. 巻 62
2. 論文標題 新型コロナワクチンの接種が在留外国人に対する態度に及ぼす影響：行動免疫システムの観点から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 実験社会心理学研究	6. 最初と最後の頁 130-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2130/jjesp.si5-3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 田戸岡好香・石井国雄
2. 発表標題 募金広告の内容が在留外国人に対する募金行動と援助政策の賛意に及ぼす影響
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小森めぐみ・田戸岡好香
2. 発表標題 ポジティブなメタステレオタイプの内容が被災した外集団への救助判断に及ぼす影響：災害救助車と援助隊の国際派遣を用いた検討
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田戸岡好香・石井国雄・樋口収
2. 発表標題 新型コロナワクチンの有効性の認知と外国人態度の関係：行動免疫システムの観点から
3. 学会等名 日本社会心理学会第62回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田戸岡好香
2. 発表標題 貧しい人は打たれ強く見えるのか？社会経済的地位が打たれ強さの認知に及ぼす影響
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田戸岡好香
2. 発表標題 外国人労働者の打たれ強さに関する認知バイアスの検討
3. 学会等名 日本社会心理学会第63回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 田戸岡好香・石井国雄
2. 発表標題 外国人労働者の痛み耐性と精神的たくましさに関する認知バイアス
3. 学会等名 日本社会心理学会第64回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田戸岡好香・小森めぐみ
2. 発表標題 メタステレオタイプの内容が外国人労働者のイメージと援助政策の賛意に及ぼす影響
3. 学会等名 日本心理学会第87回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田戸岡好香・石井国雄
2. 発表標題 日本における外国人労働者の職業イメージの調査
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミックス学会第70回大会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 ジョン・T. ジョスト（著），田戸岡好香（分担翻訳）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ちとせプレス	5. 総ページ数 27
3. 書名 システム正当化理論 第7章「貧しいけれど幸せ」：相補的ステレオタイプのシステムを正当化する可能性	

1. 著者名 田戸岡好香	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 14
3. 書名 第3章ステレオタイプ 唐沢かおり（編）社会的認知：現状と展望	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	石井 国雄 (Ishii Kunio)	東京家政大学	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	小森 めぐみ (Komori Megumi)	東京女子大学	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関